

「自己と質的研究会」2019年度活動報告

代表：土元哲平（文学研究科 博士後期課程 3回生）

問題と目的

自己エスノグラフィー（Ellis & Bochner, 2000）や当事者研究などといった、“研究者＝対象者”となる質的研究法は日本だけでなく世界的にも注目を集めている。その適用領域も様々であり、統合失調症（浦河べてるの家、2005）、障害者のきょうだい（沖潮、2013）といった臨床的な領域から、ソーシャルワーカー（松田、2010）、人材育成（伊藤、2015）、芸術教育（中島・花家、2012）、自由教育学校（牛田、2004）といった様々な領域において「主観性」あるいは「当事者」の観点から新たな知見を生成する可能性が期待されている。

しかしながら、この研究領域には多くの議論の余地が残されている。特に、自己の経験を扱う際の研究倫理の問題は、これまで十分に議論され得なかった観点であり、国際的にもわが国は議論が立ち遅れている現状がある。

本発表は、「立命館大学大学院学生研究会活動支援制度」による助成を受け、設立した「自己と質的研究会」の研究成果として実施するものである。研究会の中で議論した、自己研究を実施する上で、著者らが経験した実際上の問題点や、その解決の方向性について議論したい。

自己エスノグラフィーとは

自己エスノグラフィーの定義

自己エスノグラフィーは、文化的な経験(ethno)を理解するために、個人的な経験(auto)を描き、体系的に分析しよう(graphy)とする研究と著述のためのアプローチである(Ellis, Adams & Bochner, 2011)

自己エスノグラフィーは自叙伝的特徴とエスノグラフィーの特徴を持っている(Ellis & Bochner, 2000; Chang, 2008)。研究者が埋め込まれた文化を理解するために、個人的経験を用いるという点が自己エスノグラフィーにとって重要である(Ellis & Bochner, 2000; Chang, 2008; Spry, 2001)。

ここで留意すべき点は、自己エスノグラフィーは研究者“自身”の経験の分析のみを指しているのではないという点である。

Hayano(1979)は、研究者が「仲間の人々(own people)」を研究する際に自己エスノグラフィーの語を用いた。つまり、自己エスノグラフィーという語は、**研究者の個人的経験を対象とするものの、自己の内的過程の探求のみに閉じていない**ということである。

したがって、本発表で議論する倫理的問題も、研究者自身の経験に対する研究（自己研究）に留まるのではなく、研究者の仲間、家族といった親密な他者を対象とした研究（他者研究）においても同様に生じ得るものとして考えている。

研究倫理に関する議論(2018年度)

自己エスノグラフィー、あるいは自分自身に対する研究を実践することで、顕名性にもなる倫理的問題が浮かび上がることとなった。研究対象者のアイデンティティが研究の中でどのように描かれるかという点は、研究対象者の匿名性が高い他者を対象とした研究（他者研究）では無自覚となることがある。

私的な日記を自己エスノグラフィーのデータとして扱う場合には、その日記の記述を、研究のために生成されたナラティブと並列にせず、慎重に扱っていく必要がある。また、研究者が論文の中で他者を描く際には、その登場人物をどのように扱っていくかという点に留意すべきである。

他者を、自己の物語の登場人物として描く自己エスノグラフィーの実践において、他者の描き方についての配慮は、研究全体を通してなされる営みである。他者を承認し、倫理的に描いていく中で、自己エスノグラフィーは「他者の中に自己を見出す」という方法で自己理解を深めていくことができるのではないだろうか。

他者との関係性を記述する自己エスノグラフィの可能性

日本発達心理学会におけるラウンドテーブル企画

土元 哲平(企画)・上川 多恵子(司会)・町田 奈緒士・伴野 崇生・沖潮 満里子(指定討論)

コロナウィルスの影響により、今回は学会自体が「不参加発表」（大会は成立したものと看做すが、開催期間に会場には参集しない）扱いとなった。しかし、学会に向けた議論の過程で各研究者にとつての「他者」に対するそれぞれの見方を共有することができた。

自己エスノグラフィとは、研究者が自文化を記述的に探求するひとつのアプローチである。近年、心理学の領域においても、自己エスノグラフィが紹介、実践されるようになってきている(e.g. 沖潮, 2013; 2016; 町田, 2018; 土元・小田・サトウ, 2020 in press)。ところで、これらの研究が示すように、自己エスノグラフィにおける自己の経験の諸相は、多くの場合「他者」との関係性を描く中で立ち現れてくることがある。それでは「自己の経験」を扱う自己エスノグラフィは、どのように「他者との関係性」を記述し、問い直すことができるのか？

語り合い法における自己エスノグラフィ的な記述の持つ意味(町田)

報告者は、これまでに「語り合い法」（大倉, 2002）を用い、トランスジェンダーへのインタビュー調査を行ってきた。その中で、本手法には、自己エスノグラフィ的な記述が含まれることを感じるようになった。本報告においては、なぜ他者の体験を了解していくにあたり、自己エスノグラフィ的な記述が必要とされるのかについて検討したい。

組織との関係性を記述する自己エスノグラフィ(伴野)

報告者はこれまでNPOや学校、会社等と関わりながら、「難民等」への学習支援を実践してきた。本報告では、報告者自身の変容過程を記述した経験から、組織との関係性を記述する自己エスノグラフィについて見えてきたことを、特にその可能性と限界という観点から報告を行う。

「ヒュッゲな時間」の意味—自己エスノグラフィの記述から—(上川)

近年日本でも「世界一幸福な国」と呼ばれるようになったデンマークについての書籍が数多く出版されている。日本でデンマークに関する話題が取り上げられるようになった背景には、この「幸福感」というキーワードがあるだろう。そのような書籍を概観すると「Hygge」という言葉がよく取り上げられている。本発表では、この「Hygge」（以下、ヒュッゲ）という言葉の意味を考えつつ、「わたし」の人生の中に見られるヒュッゲな時間について考察する。そして、ストレス社会と言われる現在における「個々人のヒュッゲな時間」に目を向ける大切さに関する提案を行いたい。

自己エスノグラフィにおける「社会」の意味(土元)

自己エスノグラフィは、社会(や文化)に影響を受けながら発達していく自己を描くものであるが、そこでの「社会」とはどのようなものだろうか。それについて本報告では考えていきたい。報告者は、自らがキャリア支援を受けてきた経験を、複線経路等至性モデリング(TEM: Sato, 2017)を用いて分析してきた(Auto-TEM)。そこでの成果と、文化心理学(Valsiner, 2007)の理論に依拠しながら、自己エスノグラフィにおける自己と社会との関係性について考察したい。

[指定討論] (沖潮)

「対話的な自己エスノグラフィ」(沖潮, 2013; 2016) の視点から、話題提供の内容を踏まえ、自己エスノグラフィにおける自己と他者との関係性について指定討論を行う。